

詩歌・小説の中のはきもの (第31回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

302 6時が鳴った。炉ばたをきれいにしてからベスは1足のスリッパをあたためようとそこへ並べた。この古びた室内靴を見ると娘たちはなんとはなしになごやかな気持ちになってきた、もうじきお母さまが帰っていらっしゃる、みんなの顔はお母さまをお迎えするので明るくなった。
ルイーザ・メイ・オルコット

★『若草物語 (吉田勝江訳)』から。父親は軍隊の布教師になっている。子供たちはみんな親思いで、母親を中心に、けなげに父親のいない家庭を守っている。傷んだ母親のスリッパに代る新しいスリッパを、誰がプレゼントするか姉妹は、「私よ、私よ」と言う争う。高校の英語教科書で教わったこの物語の冒頭「クリスマス ウォントビー クリスマス ウィズアウト エニープレゼント (贈物のないクリスマスなんてクリスマスじゃない)」を今も覚えている。

303 くつやのクリスマスキャロル
はやくこい クリスマス
はやくこい クリスマス
革をたたいて くぎをうって ぬい
あわせれば
どんなにさむくてもこわくない
ルース・ソーヤー

★『とってもふしぎなクリスマス (掛川恭子訳)』から。雪深いアルプスの小さな村で、3人の子を残して妻に先立たれた靴の修理をしている貧しい職人一家が迎えた不思議なクリスマスの夜の話が書かれた絵本である。西洋の子供は、小さなときからこうして靴についてのファンタジックな物語とともに

に育てられる。それは羨んでも羨みきれないほど幸せなことである。物語をもたない靴という物品を履いて育つ子供は可哀想だ。

304 冬下駄くらしを売らむと日々に雪待ちて
生活と言ふは業のごとしも
桜庭誠四郎

★『昭和万葉集』から。農家の子供だったので不作を怖れて、雨や風、日射しを気にしながら育った。長じて靴会社に勤め、防寒靴の売れ残りを心配して、雪の1日も早く来ることを願い、夏になれば、サンダルやメッシュの夏物の在庫が心配でカンカン照りの暑い日の続くことを願った。季節がその季節通りに変化するか、退職した今も気になる。

305 浅草で一番不思議に感じられるのは
晴雨に敏感なことだろう。晴れていれば、
男女誰も申し合わせたようにツツカケ
か、サンダルを履いている。雨がパラパ
ラと降りかかると、それが一瞬にして、
ゴムの半長靴や、長靴に変わるのである。
その目覚めるような早変りが面白い。そ
こで、私もツツカケとゴム長靴に一切依
存するわけである。

檀 一雄

★『火宅の人』から。新劇女優の入江久恵と出奔し浅草千束町に住んだのは昭和32年のことである。「火宅」とは仏教の言葉で煩惱の止むときがなく、安らぎのない世界をいう。浅草は靴が中心のはきものを地場産業とする土地であるのに靴が出て来ないのが時代をあらわしている。

306 やがて、陰鬱な11月、暗い夜がやってきた。そんな時にはマーチはハイブーツを履き、踝のところまで泥だらけになりながら歩き回った。

D・H・ロレンス

★『狐（丹羽良治訳）』から。目の前にいる人物を描写するのに、服装の一環として履いている靴を記述するというのは欧米の小説としては普通のことである。しかし、ロレンスは、ある季節になるとどんな靴を、どんな状態にして履くかまで記述しているのである。

307 とりわけ気を遣っているのは足もとです。靴下をはいて部屋履きの靴（ルームシューズ）を履きます。足があたたかいと寒さ冷たさもずいぶん違いますので。ウールの靴下をはいだけで台所の木の床の上立っていると、足の裏から冷たいのがのぼってきます。

…履きなれると、はだしや靴下だけではなんとも不安です。足を多少しっかり包む方が、私はすごしやすい。

大橋 歩

★『すてきな気ごこち』から。フローリングの家が増えたから、今後スリッパに代えて履く人が多くなると思われる。もう一つルームシューズの普及を促すのは高齢化である。院内ではスリッパに履き替えさせる外科病院へ行くと、院内でも杖をついている足元の危うい年寄りにはスリッパなしで歩いている。健常者には何でもないスリッパも、老人や病者が階段を昇降する時などは大変な負担になっている。

308 1等車のステツプの前には靴拭きのマットが敷いてある。私の靴は昭和14年に誂へて造つた上等品で、キツド皮の深護謨である。深護謨と云ふ靴の形に馴染みがない人は、昔の枢密顧問官が穿いた様な靴だと思へばよろしい。立派な靴だが古くなつて、横腹に穴があいたから、大きなつなぎか当つてあるけれど、それは止むを得ない。その靴の裏をマットでこすつて上がった。山系は南瓜を踏み潰

した様な貧弱な恰好の靴を、同じ様にマットでこすつて上がつて来た。

内田百閒

★『特別阿房列車』から。昭和25年の話。「用事がないのに出かけるのだから、3等や2等には乗りたくない」といって1等に乘る。百閒は借金王で、借りて借りて借りまくり、それを文章にして暮らしていた。お金がなくて靴につきをあてていたわけではない。物がなかったのである。へそ曲がり師匠の旅にしばしば随伴する「山系」とは、ヒマラヤ山系にひっかけて平山という教え子の仇名である。こちらの靴が貧弱なのは貧窮していたからであろう。

309 難破した寧波船の積荷、元禄11年正月4日。

牛皮 350張

山馬皮 1000張 野馬の皮、裘（かわごろも）、足袋をつくる。

鹿皮 5600張

★『漂着船物語 大庭 脩』から。寧皮は中国、杭州湾口にある、日本との交易の要地であった。わが国は、今も皮革の輸入が多い国であるが、江戸時代に対馬藩が皮革交易で巨額の利益をあげていたことなど意外に知られていない。各藩とも皮革の確保にはいろいろ工夫をこらしている。詩歌の中にはこのような史実はまず詠まれることはない。

310 「起きろ、起きろ、みんな起きろ。革命だぞ！」

するとそれに応えて驚くべきことが起つたのです。脱ぎすててあつた上衣がするすると生物のように立上りました。ついでズボンが立上りました。下駄箱から靴がぼんと飛下り、まるで透明人間がはいてでもいるように自分で歩きはじめました。机の上から眼鏡があげは蝶のように舞い上がりました。

安部公房

★『壁』の第1部「S・カルマ氏の犯罪」から。「同志、やはり仲間同士の対立はよ

したほうがいいと思うな」と靴が議論に割って入る。いかにも靴らしい中立的な穏やかな発言だ。絵本では靴はしばしば擬人化されるが、文学の中ではまことに珍しい。ある朝、突然自分の名前を忘れてしまった主人公カルマ(サンスクリット語の「罪業」)氏は、夜、眠っているわけでもないのに、全身がしびれてしまう。そしてドアの隙間から入ってきた名刺が「革命だぞ！」と叫ぶのを目撃する。

311 草の生える小道にかぐわしく枝をさしかけている段丘の果樹たち、それを植えたこの家の大昔の所有者は（まちがいでなく女性だろう）、砂糖漬けの保管所として階段の下に棚を設け、寒い1月の朝にスパイスをきかせたすももの砂糖漬けをあける贅沢を味わっていたにちがいない。そこでわたしも、手描きの陶器や、高価な靴を愛する気持同様、母からすんなりとわたしに伝わったはずのジャム作りの芸術をマスターしようと考えた。
フランシス・メイズ

★『イタリア・トスカーナの休日』から。こういうさり気ない記述の中に、靴が現われるというのがいかにも西洋の人らしい。日本人の書いたもので、自分が大切にしている、愛着のある“宝物”として靴や下駄を挙げる人を見たことがない。靴が単なる消耗品になっているうちは、本物の靴は我が国には生まれえないのかも知れない。

312 除夜の鐘が鳴り出すと、表の通りから一斉に、カランコロン、カランコロンと神社へ向う人達の下駄の音がしだす。年の始めに大人も子供も揃って下ろした新しい下駄、そして、当時は今と比べて寒く、土の道路であり、その土がカチンカチンに凍っているため、下駄で踏み鳴らす音がとても良いのである。…歩く度、走る度、こっぼり下駄がコポコポと音を立て、こっぼりについていて鈴が鳴るさわやかさが嬉しかったのである。
小川恵子

★『こっぼり下駄』から。どこの家にも、

新年に家族揃って下駄をおろす習慣があった。その上、数え年だったから全員が1歳年をとる。昔の正月には過ぎ行く年月をスパッと区切る爽快な感じがあった。大晦日、昼間霜どけにゆるんだ泥道が凍りついた夜、ピーンと張り詰めた寒さの中に出て、下駄の音も高らかに、身を引き締めて神仏を詣でに行った。「新しき足袋をはきたる少年の日より楽しき新年ありや 土屋文明」。足袋も下駄に合わせて新調したのだ。